

苦しき中で残した作品の輝き 佐佐木頼綱

三十二歳で自殺した萩原慎一郎氏の特集が『555』で組まれ、遺歌集となった『滑走路』の歌が広く紹介された。また「角川短歌7月号」では特別座談会を行い氏の歌の再評価を行っている。

・夜明けとはぼくにとつては残酷だ 朝になつたら下つ端だから
・空だつて泣きたいときもあるだろう葡萄のような大粒の雨

歌集には非正規労働者という立場の生きづらさや、片想いの切なさの歌が並ぶ。社会問題を背景にしながらも爽やかな歌柄が多くなりの人に支持される理由であろう。

・抑圧されたままにいるなよ ぼくたちは三十一文字で鳥になれ
るのだ

歌集編集者であった住谷はる氏は「短歌を作ることが彼にとつて生きることそのものだった、ということなのだと思う」とSNSに記している。

安井高志遺歌集『サトウルヌス菓子店』も作者が三十一歳という若さで事故死し、遺族と依田仁美氏によつて刊行された歌集。

・あまいあまいケーキを焼いてあげようきれいな海にきみがなる
まで

・ハツカ水飲ましておくれお姉さん恨みが綺麗な星になるなら
死生観と瑞々しい感性が合わさつた歌が点々とあり、作者の死と重なりしつとりと伝わってくる。中高年が大半の歌壇で若い歌人

が死を詠うのは難しい。人生という時間と歌人としての研鑽とを積み重ねたら彼はどのような歌を詠ったのだろうかと思像した。

・月並みなお礼のことばでは相済まぬけれどもことばが、ことばみつからぬ
杜澤光一郎「アリガタウ・有難う」

・やたらに殴る親父なりしがその痛みかへりみてむしろなつかし
きかな

・立春の雪の日の朝やうやうにわれをとりあげくれし産婆さん有
り難う

「短歌往来4月号」に発表された杜澤光一郎氏の三十三首。死期の近い自分を詠んだ連作で、回想の中で繰り返される「有り難う」が連作を読み進める中で胸に迫ってくる。

・この坂はきつと最後にのぼる坂けふホスピスの予約にのぼる
・おとうとのほほを撫でやる「元気でね」六十八歳の弟の頬

・いつまでを眠りぬらんかたつむり来る春までは待てざるもの
を

古川典子歌集『鳥の時間』より。余命という時間の中で詠まれた歌の真摯さ、純度、密度が読者の心を打つ。私は彼女の歌集制作に関わつた一人だが原稿を受け取る際、氏より「余命宣告を受けてただ死を待つ時間をしばらく過ぎました。そんな中、この時間を歌集の完成を待つ時間に変えようと思つたんです。」との電話を受けた。歌集は超特急で刊行され贈呈先の歌人からは感想や励ましの手紙が届いているようである。

苦しき生活の中で遺した作品には輝きがあり、多くの人を魅了する。彼らの精神は読者の中に輝き続け、寿命を伸ばすのだろう。